

2018年度しあわせ研究

学生とともにしあわせを考える

主任 渡部博志



2016年4月に、本学は「世界の幸せをカタチにする。」というブランドステートメントを掲げ、その3ヶ月後の2016年7月にしあわせ研究所が設立されました。この研究所に集う教員が中心となって、2017年より授業を開講しています。その名も「しあわせを考える」という科目です。

2年生以上の全学部の学生が履修できる全学共通科目として開講しているこの科目には、いくつかの特徴があります。例えば、授業はオムニバス形式で、担当する教員は全員が異なる学部にも所属しています。科目名にあるとおり、各教員が自らの専門の見地から「しあわせ」とは何かを問うため、同じ「しあわせ」という概念に対して人文科学・社会科学・自然科学が、それぞれのアプローチで迫ります。さらに、武蔵野キャンパスと有明キャンパスの両キャンパスで、同じ内容の授業を行うとともに、夏休み開始直後に両キャンパスの学生が一堂に会して、最終授業課題を発表し合うという、キャンパス横断的な機会も設けられます。

2018年度の授業の中では、障害を持つ当事者の方に来て頂き、お話をうかがうとい

う試みをしました。有明キャンパスでは、幼少期に罹患した肺炎の後遺症で30代半ばで聴力が完全に失われた聴覚障害の方に、武蔵野キャンパスでは2万人に1人の割合で発症する指定難病「軟骨無形成症」のために130cmの低身長である方に、それぞれお越し頂きました。

当事者の方から話を聞くことで、初めて知ることもあります。聴覚障害の方の中にもカラオケに誘われて楽しむ方もいれば、身体的制約があっても自ら登山を楽しむ方もいる。障害を持っている方をかわいそうな存在だと短絡的に考えることは、いかに傲慢な考え方であるかを、受講生は改めて理解していきました。このことが分かれば、障害を持っている方に対する声のかけ方は、「何かお手伝いできることはありますか」というのが望ましい、との当事者の方からお話しにも納得がいくのでした。

授業の中では、視覚に障害を持っている方の誘導方法も学びましたが、声のかけ方を知ることとあわせて、何か困っている他者に対して最初の一步が踏み出せることが、意外にもしあわせをカタチにする事のきっかけになるかもしれません。本学の学生は、大学の掲げるブランドステートメントを体現していく同志と言えます。これからも、この授業を通して、学生達としあわせについて考えていきたいと思えます。